鹿大広報 No.181
SUMMER/2009

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

http://www.kagoshima-u.ac.jp/

鹿大「知」の探検
東京裁判を政治学の視点から読み解く
法文学部　日暮 吉延教授

鹿大の新たな試み
教員免許状更新講習への取り組み

アラムナイ追跡隊　九州大学病院　笹栗 正明さん

輝く鹿大生　富山 晃一さん（理工学研究科2年）

鹿大見てある紀　北米教育研究センター

鹿大への提言　鹿児島県観光プロデューサー　奈良迫 英光氏

なんでも情報版「みみずく」
稲盛アカデミーが本格始動　ほか

かごしま探訪　「薩摩焼酎にみる地域おこし」農学部 鮫島 吉廣教授

特集

鹿児島大学のボランティア

～学生にとってのボランティア活動の意義～

特集

鹿児島大学のボランティア

～学生にとってのボランティア活動の意義～

鹿児島大学では「進取の気風」あふれる学生を育成することを目標としている。その一環として、平成20年度を「ボランティア元年」と位置づけ、ボランティア活動を通じた人材育成を開始した。「ボランティア」を学生の人間力や学士力を高める教育機会として位置づけた鹿児島大学の取り組みを紹介する。

鹿児島大学憲章では「鹿児島大学は、学生の潜在能力の発見と適性の開花に努め、幅広い教養教育と高度な専門教育を行うとともに、地域の特性を活かした進取の気風を養う」という教育目標を定めている。

この大学憲章を具現化し、進取の気風あふれる学生を育てるには、従来のカリキュラムに加えて学生時代から積極的に社会との関わりを持つことが必要との考えから、鹿大は平成20年度を「ボランティア元年」と位置づけ、共通教育科目「ボランティア論」を開講した。学生は講義でボランティアの精神を学び、実際のボランティア体験を通してその意義を学ぶことができる。また、「鹿児島大学ボランティア支援センター」が設置され、学生や教職員のボランティア活動を大学を挙げてサポートし、大学と地域を結ぶ拠点ができあがった。今後は、鹿大のボランティアチームを結成し、さまざまなボランティアプロジェクトを開始する予定だ。

今回の特集ではボランティア関連の新しい取り組みを中心に、学生のボランティアサークルなどを紹介し、大学にとってのボランティア活動の意義を考える。

キャンパスのボランティア清掃を行う学生たち

「ボランティア論」の開講

平成20年度、鹿大では大学憲章の理念を学生と共有し、具現化することを目指し、共通教育科目「ボランティア論」を新設した。

社会の一員として社会性やモラルを身に付ける

ボランティア論の対象は全学部の1年生。入学後すぐにボランティアの精神を学び、ボランティア体験を通じて社会との関わりを持ってもらうのがねらいだ。「最近の学生は、個人を尊重することを教えられてきたためか、社会や政治に無関心で、社会とのつながりが希薄になっている。学生がボランティア活動を通して社会の一員としての自覚を持ち、社会性やモラルを身に付けることを期待しています」とボランティア論実施チームリーダーの林國興教授(農学部)は語る。

講義と体験学習によってボランティアの精神を理解

ボランティア論は前期と後期に開講されており、平成20年度は前期・後期合わせて約１２０名の学生が受講した。

ボランティア論は講義と体験学習から成る。講義では、自らボランティア活動を行っている鹿大の教員のほか、学外からボランティアの「専門家」を講師として招き、学生にボランティアの精神、歴史、意義、事例や問題点などについて教授している。学外の講師は、自らボランティア施設(ＮＰＯ法人)を主宰していたり、国際的なボランティア活動を行っている人などさまざまだ。

講義でボランティアについて一通り学んだ後、学生はボランティア体験学習に参加する。鹿児島県や鹿児島市の社会福祉協議会からの紹介もあり、体験学習の受け入れ先は約１００カ所。人数制限はあるが、学生たちはこの中から希望の受け入れ先を選ぶことができる。体験できるボランティア活動は児童関係、介護・福祉関係、動物保護、鹿大の博物館や農場での業務補助など多種多様。体験後は受け入れ先から参加の証明書と体験学習評価が送付され、学生の成績に反映される。

受講した学生からは「自分の存在価値を見出すことができる」「社会のお手伝いをさせてもらっているという謙虚な気持ちが大切と感じた」「ボランティアによって普段の生活と異なる世界を見ることができた」などの感想が寄せられている。

ボランティア体験
(薗牟田池での定置網による外来魚駆除)

捕獲したブルーギル

ボランティア論で行われた教育学部キャンパスの散乱ゴミ調査

≫ボランティア論の授業計画(2009年度シラバスより)

1回	ボランティア論の授業概要
2回	ボランティアの精神ならびに歴史
3回	現代社会におけるボランティアの意義
4回	ボランティア活動の問題点と事例
5回	ボランティア・NPOと新しい公共
6・7回	地域社会におけるボランティア
8回	国際社会におけるボランティア
9回	自然保護におけるボランティア
10回	ボランティア活動の現状
11~14回	ボランティア体験
15回	統括講義、討論、レポート

「ボランティア論」に参加して

学生の声

鹿児島大学理学部生命科学科1年
松岡 遼平さん

高校のとき所属していた生徒会でユニセフの募金活動などをボランティアでやった経験があります。大学でもボランティア活動をやってみたいと考えていたところ、科目の中に「ボランティア論」があるのを見つけ、受講してみることにしました。

講義では、ラオスなど、海外でボランティアをされている方の話を聴くことができました。海外の現状や問題について知り、日本の生活がいかに恵まれているかを改めて自覚しました。また、講義の中で教育学部キャンパスの清掃を行い、ゴミの種類や数を調査したこともあります。

ボランティア体験では、ラムサール条約湿地に登録されている藺牟田池の外来魚駆除に参加しました。池に入り、みんなと協力して網で稚魚を捕ったり、産卵前の成魚を釣りで捕まえたりしました。短時間でしたが、とても達成感があります。

ボランティア論はさまざまな形でボランティアをされている方々の話を聴けるとても良い機会です。また、ボランティア体験のメニューは数多くあり、それぞれの興味に応じた体験先を選べます。ボランティア論で学んだことを活かして、これからもボランティアに関わっていきたいと思います。

鹿児島市社会福祉協議会の声

鹿児島市社会福祉協議会
ボランティアセンター所長
井上 明彦さん

私どもは平成16年から地域福祉活動計画に沿ってさまざまな取り組みを展開しており、若い方々へのボランティア活動の促進にも力を入れています。ボランティアセンターに登録されている鹿大生の方は多いですが、鹿大の「ボランティア論」によって学生さんが一層ボランティア活動に目を向けてくれるのではないかと期待しています。

ボランティア活動は、さまざまな可能性を秘めています。学生生活ではどうしても同じ世代の方々との交流が多くなりがちですが、ボランティア活動で外に一歩踏み出せば、今までとまた違う世界に触れることができます。その中で新しい発見があり、自分の中の新たな一面に気づくこともできます。お手伝いをさせていただいた方から教えられることもたくさんあります。これは理屈でなく、実践してみて初めてわかることです。

市社会福祉協議会として「ボランティア論」のお手伝いをしましたが、真面目に目的意識を持って取り組んでおられる学生さんが多いと感じました。毎日の生活の中で、自分に何かできることはないかとお互いが相手に関心を持つという気持ちが、少子・高齢化の進む社会を支える原動力になります。学生さんにはまず、小さなことから実践してみてくださいと伝えたいですね。

受け入れ先の声

児童デイサービスあゆみ園長
福元 三三子さん

ここは、心身に障害のある未就学児が保護者と一緒に通園し、遊びや運動を通して日常生活に必要な行動を身に付けるための施設です。これから社会に出る学生さんがボランティアや障害のある子どもたちについて知ることは、理解ある社会をつくることにつながる、意義のあることだと思います。

昨年いらした学生さんたちには、子どもたちと接するときの注意事項を簡単にお話しした上で、子どもたちと一緒に遊んでいただきました。初めのうちは非常に緊張されて不安そうでしたが、活動が始まると、それぞれがよく考えながら粘り強く子どもと接してくれました。「またボランティアに来たいです」という意思表示をしてくださった学生さんもいました。

学生さんたちとは体験前に電話で打ち合わせをするのですが、電話が第一印象になってしまいますから、話すことを整理してから電話をしたほうがいいかなと思いました。また、自分がどんな施設に行くのか、事前に予備知識を得ておくと必要以上に不安にならずにすみますし、学びもより深くなると思います。

たった1日、半日の経験が人生に影響を与えることもあります。学生さんにはボランティア活動を通していろいろなことを学んでほしいですね。

鹿大のボランティアサークル

鹿児島大学にはボランティアサークルが数多くあり、学生たちは自主的にボランティア活動を行っている。今回はその中から3つのサークルの活動を紹介する。

ウミガメ研究会

部長:佐々木 岳さん
水産学部3年

ウミガメの卵の乱獲が問題になった昭和61年に設立された歴史あるサークル。

鹿児島県吹上浜でのウミガメの上陸産卵調査、孵化した子ガメの調査などを中心に、笠沙町野間池での混獲調査(定置網にかかったウミガメの個体情報などの調査)、吹上浜における長高幅調査(砂浜の浸食状況の調査)・海浜植物植生調査・ストランディング調査(浜に打ち上がったウミガメの死体を解剖して個体情報などを収集)などを実施してきた。学生たちは早朝や夜に交代で調査地へ出かけ、昼間は大学に戻って講義を受けるという忙しい毎日を送っている。

また、日本ウミガメ協議会と連携した日本ウミガメ会議での発表や、小学校を訪れての出前授業なども積極的に行っている。

平成20年、ウミガメ研究会に鹿児島の放送局・南日本放送(MBC)からMBC賞が授与された。鹿児島県ウミガメ保護条例(昭和63年)の制定にも寄与するなど長年にわたる保護活動や研究活動が高く評価されている。

「地道な調査によってウミガメについての現状や正しい知識を伝えていくことが保護につながると考えています。今後は他のボランティア団体と協力した企画などができればと考えています(佐々木部長)」

YELL ～エール～

部長:林 貢平さん
法文学部3年

平成16年設立のサークル。動物虐待や捨て犬・捨て猫、毛皮の問題、絶滅危惧種の密猟など動物に関する問題を調べ、多くの人々に知ってもらうための活動をしている。毎週金曜日の部会で、それぞれの学生が調べた内容を発表。6月の文連発表(文系サークルの発表会)や11月の学祭では、動物問題についての展示を行っている。インターネットを通じて海外の動物事情について現地からの報告を得たり、他大学で「動物福祉論」を学ぶ学生との情報交換を行うなど、調査の方法は広がりつつある。

YELLでは、地域のボランティア団体と連携した動物保護活動も行っている。毎月第2・第4日曜日には犬・猫の里親探しの会にボランティアとして参加。里親探しの手伝いをしている。今後、盲導犬や聴導犬に関するボランティア団体との連携も考えている。

「視野を広げるためにも、学内の生物関係のサークルの人とつながりをつくり、一緒に活動ができないかと考えています。地域のボランティア団体の方々は、確固たる信念のもと、休日をあてて真剣に活動をしていて、僕ら学生も見習わなければと思います。心の温かい人たちと活動することで、自分も成長できるサークルです(林部長)」

児童心理研究会 ちゃいころ

部長:前川 継徳さん
水産学部3年

昭和52年設立のサークル。「ちゃいころ」とはChild Psychologyの略。自閉症やダウン症など障害を持つ子どもたちやその家族と出かけたり、一緒に遊んだりするのが主な活動だ。

ちゃいころの活動の一つ「日曜学級」は、他大学(純心大、純心短大、鹿児島女子短大、鹿児島国際大、志学館大)の学生も鹿大に集まり、障害児やその兄弟と遊ぶというもの。年少、年中、年長、兄弟という4グループに分け、市電に乗って街へ出かけるなどの社会的体験などをサポートする。兄弟グループでは、障害児の兄弟の悩みを聞いたり、遊び相手になる。日曜学級以外にも、託児や遠足などを通じて障害児やその親と交流している。

「以前は障害を持った人を見ても見て見ぬふりをしていましたが、障害児やその親の方々とふれあうことで、価値観が変わりました。僕らができることは微々たることですが、向こうからもらうものは本当に多い。一緒に遊んだり話をすることしかできないが、そうやって彼らと接することは、僕らが将来社会に出てからいろんな分野に散らばって、理解のある住みやすい社会をつくることにつながると考えています。(前川部長)」

鹿児島大学ボランティア支援センターの設立

ボランティア支援センターのオフィス

鹿大は平成20年7月、「鹿児島大学ボランティア支援センター」を設置した。鹿大の学生や教職員のボランティア活動を支援し、ボランティアを通じた地域貢献を行っていくための拠点だ。

これまで地域からのボランティアの要請があった場合は、教員個人や各学部が窓口となっていた。これからは、鹿大へのボランティア要請の窓口は専門性の高い一部を除き、センターに一本化される。また、自然災害などが起こった場合はボランティアチームを結成し、鹿大として救援活動などに参加する体制を整えている。

データバンクを整備し学生にボランティア活動を紹介

学生がボランティア活動を継続しやすい環境をつくるため、現在、ボランティア支援データバンクの整備を進めている。学生の特技や希望するボランティアの種類などを入力し、携帯電話のメールを使って学生に合ったボランティア活動を案内できるシステムだ。活動歴も登録されるため、自身の活動の傾向などを

地域と鹿大とを結ぶ ボランティア支援センター

中山右尚　鹿児島大学ボランティア支援センター長
鹿児島大学理事（教育・学生担当）

鹿大では「進取の気風」にあふれ、世界に羽ばたく学生の育成を目指しています。そのためには、体験的な教育や地域貢献の経験が不可欠だと考えてきました。鹿児島大学ボランティア支援センターは、ボランティアを通して鹿大と地域とを結び、今活動しているいろいろな学生のボランティア団体をさらに活発化させる役割も担っていきます。すでにボランティアに関心を寄せる学生がセンターに集まりつつあり、地域のボランティア団体から数多くの要請がきております。地域からの期待をわれわれ執行部もひしひしと感じているところです。

今後も「地域とともに社会の発展に貢献する総合大学」として、学生が学業と並行してボランティア活動に力を入れられる環境づくりを推進して地域貢献を積極的に行っていきます。

＜鹿児島大学ボランティア支援センター＞
鹿児島市郡元1-21-30（郡元キャンパス 共通教育棟1号館1階）
TEL 099-285-3146　FAX 099-285-3144
E-mail volunt1@kuas.kagoshima-u.ac.jp
URL http://kss.kuas.kagoshima-u.ac.jp/gakusei/main/volunteer/index.html

（表）今後予定しているボランティアプロジェクト

教育補助等ボランティアプロジェクト	小中学校において授業・課外活動などの支援を行う
災害ボランティアプロジェクト	災害ボランティア待機要員を養成し、災害時には災害ボランティアチームとして被災地に駆けつける
国際観光地かごしま応援プロジェクト	大型外国船入港時の通訳・ガイドの需要が多いため、留学生などの派遣を行う
限界集落支援プロジェクト	県やNPO団体等と連携し、支援策を講ずる
ボランティア技能開発プロジェクト	手話、点字、介護等の講座によって各種技能を身につけ、各種活動へ参加する
希少生物保護ボランティアプロジェクト	希少種保護のボランティア活動を充実させる
キャンパスクリーンプロジェクト	学生や教職員が自らキャンパスを清潔に保つ活動を行う
ピアサポーター養成プロジェクト	学生相互の関係を高め、学生の心理的健康維持のため、学生を「プリカウンセラー」として養成する

センター看板上掲式の様子（右は吉田浩己学長、左は中山右尚ボランティア支援センター長）

知るのにも役立つ。専門知識や技術を必要とするボランティア活動への参加要請もあるため、学生だけでなく、教職員の登録も促していく。

また、センターでは今後の活動の柱として、8つのボランティアプロジェクトを計画している(表)。

センターの運営を支援する学生ボランティアを養成

将来は、学生教育とボランティアを連動させ、学生が大学生活において一度はボランティアを経験するような仕組みを検討している。また、センター自体の運営を支援する学生ボランティアを養成することも計画している。「大学側が旗を振るだけではだめで、学生自身がセンター運営にも参加し、さまざまな企画を立てたりできるようになってほしい。学生の力をうまく引き出せるようなセンターを目指します」とセンターの運営を担当する大坪治彦学長補佐は語る。

センターは、学生会館の真向かい、共通教育棟1号館の1階にオフィスを構えており、学生や教職員が集いやすい場所にある。ボランティア関連の参考書籍が並ぶほか、ボランティア経験のある専門職員が常駐し、ボランティア活動に関心を持つ学生の相談に応えられる体制を整えている。

センターで準備したジャンパーを身に着けた学生たち
(左端は大坪治彦学長補佐)

COLUMN

農学部の「農業ボランティア」

農学部は平成21年1月に「農業ボランティア」という取組みを開始した。学生がボランティア活動を通じて農業の現場を学びながら、高齢化や後継者不足に悩む農家を支援する。

1月の試行では、鹿児島市が作成した受け入れ先農家リストを基に、受け入れ先として鹿児島市喜入の白ネギやスイートコーンを栽培する農園が選ばれた。参加した農学部の学生4名は草取りや収穫などの作業を手伝いながら、天候や収穫、流通などについての現場の声を聞くことができ、学生は刺激を受けている。

農学部ではインターンシップや附属農場での農場実習など、体験を通じた教育プログラムを重視している。将来は農業を支援するボランティアを進めるための事務局を設置し、従来のプログラムとも連携させて、専門知識と実践的な能力を持ち合わせた学生の育成を目指している。

学生有志がボランティアでキャンパス清掃

鹿児島大学では、5月30日、「5(ゴ)3(ミ)0(ゼロ)」の日にちなんで学生有志による郡元キャンパス内の清掃が行われた。

今回の取り組みは、一人の学生が手作りでポスターを作成して、学内に周知したことから始まったもので、当日は、約70名が参加。中央食堂の周囲を中心に約1時間にわたって、ゴミ拾いを行った。

中心になって企画した学生は、「学生生活の拠点であるキャンパスをきれいにしながら、学生間の交流を図れることは意義深いです」と語った。

COLUMN

社会との関わりの中で学生の人間形成を促す教育を推進

今回紹介した「ボランティア論」の開講やボランティア支援センターの設置を皮切りに、鹿大では今後もさまざまな教育プログラムやボランティア支援をスタートさせていく。

こうしたボランティアを活かした教育においては、学生が自己実現を図り、自発や利他の心を育むことをねらいとしている。また、学生が地域社会に飛び込み、地域の人々と交流することを通じて、学生が社会の一員としての自らが果たすことのできる役割を意識し、自らの知恵や知識、行動力や判断力などをさらに発展させていく必要性を自覚することも、教育目標の一つである。

一方、鹿大生は自主的にボランティア活動を企画・実践しており、大学の支援の下、それらはますます活発になるだろう。ボランティア活動を経験した彼らは、自分の知らない世界を垣間見て新鮮な驚きを感じ、自己と社会とのつながりについて深く考えるようになる。

「ボランティア」という視点が鹿大の教育に新しい風を吹き込み、「進取の気風」あふれる鹿大生を育成することが期待されている。

東京裁判を政治学の視点から読み解く

東京裁判は、今なお肯定論と否定論が激しく対立するテーマである。法文学部の日暮吉延教授は一次資料の分析を基本とした実証的な研究によって、東京裁判を「国際政治の場」としてとらえ、冷静に評価することを私たちに教えてくれる。

法文学部法政策学科
政策科学講座 教授
日暮 吉延

ひぐらし・よしのぶ/昭和37年東京都生まれ。昭和61年立教大学法学部法学科卒業。平成5年立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程満期退学。同年鹿児島大学教養部専任講師に就任。同大学法文学部助教授を経て、平成16年から現職。政治学博士(学習院大学)。専門は日本政治外交史、国際関係論。著書に『東京裁判の国際関係――国際政治における権力と規範』(木鐸社、第32回吉田茂賞)、『東京裁判』(講談社現代新書、第30回サントリー学芸賞[思想・歴史部門])『東京裁判を正しく読む』(牛村圭教授との共著、文春新書)。訳書にアーノルド・C・ブラックマン著『東京裁判――もう一つのニュルンベルク』(時事通信社)、マヤ・トデスキーニ編『核時代に生きる私たち』(共訳書、時事通信社)。監修書にジョン・ルース著『スガモ尋問調書』(読売新聞社)などがある。

平成20年12月に行われた第30回サントリー学芸賞贈呈式にて
(上段右から2人目が日暮教授)

東京裁判(極東国際軍事裁判)は、アメリカをはじめとする連合国11カ国が参加し、昭和21年5月に開廷した戦争犯罪裁判である。戦前期日本の指導者28名がA級戦犯として侵略戦争の共同謀議などの罪に問われ、昭和23年11月12日には判決時の被告25名全員に有罪(うち7名に死刑)が宣告された。

著書『東京裁判』でサントリー学芸賞を受賞

東京裁判の判決60年を迎えた平成20年1月、法文学部の日暮吉延教授は著書『東京裁判』を出版した。長年の東京裁判研究の成果を一般読者向けにまとめた本書は、同年12月、優れた著作活動に贈られるサントリー学芸賞(思想・歴史部門)[*1]を受賞。選考委員からは「東京裁判に関して、現時点で、最善かつ最もわかりやすい歴史分析の書。大局的な見方を提示する一方、これまで十分明らかにされてこなかった東京裁判のいくつもの側面に光を当てている」(田中明彦東京大学教授)と高い評価を受けた。

日暮教授は、昭和21年5月から昭和23年11月にかけてGHQ(連合国最高司令官総司令部)が日本を統治した「占領期」、とりわけ、法と政治が絡む場としての東京裁判に関心

*2 「文明の裁き」論は、日本の侵略・残虐行為の責任を「文明」的な裁判方式で追求したことを評価する肯定論。「勝者の裁き」論は、侵略戦争の開始等を国際法で裁くことは事後法の適用である上、勝者の政治的報復にすぎないとする否定論。

*1 **サントリー学芸賞**
(財)サントリー文化財団が主催する国内有数の学術賞。「政治・経済」「芸術・文学」「社会・風俗」「思想・歴史」の4部門がある。独創的で優れた研究・評論活動を、著作を通じて行った個人に贈呈される。

を持ち、研究に取り組んできた。「東京裁判の評価については同時代から『文明の裁き』論と『勝者の裁き』論が対立してきました。今でも生臭い政治的テーマで、どうしても感情的・イデオロギー的な議論に陥りがち。しかし、議論の土台となる事実関係に思い込みや間違いが多いのです。これでは冷静な議論は難しい」[*2]

政治学の視点から 東京裁判を分析・検討

日暮教授は専門である政治学の視点から東京裁判を研究している。海外での評価も高い。「権力をめぐる諸現象、人間が人間を統治する営みが政治。政治学は『権力』を中心に物事を見る学問です。複数のプレイヤーが動くゲームを見るかのように、政治学の視点で物事を見て、起こった出来事を整理すれば、東京裁判をわかりやすく客観的に説明できると考えました。そのためには一次資料から事実を発掘し、分析することが必要です」

海外に比べて日本では占領期に関連する一次資料の公開が少ない。日本で調査を進める一方、アメリカやイギリス、オーストラリアなどの官公庁や公文書館などで資料を渉猟し、東京裁判に関する事実を一つひとつ読み解いてきた。

調査の結果、新しい発見が幾つもあった。

例えば、侵略戦争を国際法上の犯罪とする「平和に対する罪」[*3]の事後法問題などをめぐり、一枚岩だと思われていた判事団は、実は内部分裂をしていた。また、とかく日本で称賛されがちなパル判事の少数意見書はインド政府の公式見解でもあるとの見方が根強かったが、多数判決と意見を異にするパル判事はインド政府から疎んじられており、その意見書は政府の見解とは無関係だった。さらに、A級戦犯の量刑決定過程においては、事後法問題の恐れがある「平和に対する罪」だけでは終身刑が限界と判断され、重度の残虐行為に責任があったかどうかが死刑の決め手となったことなども明らかになった。

東京裁判は「国際政治の場」

一次資料の分析により判明した多くの新事実に基づき、日暮教授は「東京裁判は『裁判』というよりも『国際政治の場』」だと考える。「たとえば国際連合も正義を実現する場と思われがちですが、実際の国連は各国の利益が衝突し、それを調整する場。東京裁判も同じです。アメリカは日本が侵略戦争を開始した罪を問おうとしたが、英連邦諸国、中国、オランダ、フランス、フィリピンは日本の残虐行為を裁くのに執着した。各国・各人の利害が複雑に絡み合いながら政策が決まっていく過程は、国際政治そのものです」

また、東京裁判は、連合国にとって日本を無害化する手段であり、日本にとっては軍国主義者を排除して対米協調を強化できるというメリットがあった。東京裁判は「安全保障」の観点から双方に利益をもたらしたと日暮教授は現実主義的に見ている。「『文明の裁き』という肯定論と『勝者の裁き』という否定論に分かれて論争が繰り返されてきましたが、東京裁判はこの二つの側面を内包する国際政治。裁判として見れば欠陥や問題点が多いものの、日本が払った戦争の代償として評価しなければならない側面もあります」

現在、日暮教授は「戦犯釈放をめぐる戦後日本外交」というテーマを研究している。「今でこそ『戦犯』というと極悪人扱いですが、戦犯が釈放された1950年代、日本人は釈放に反発せず、容認していました。戦犯の釈放過程を研究することで、占領期から高度成長期への端境期の日本の姿も明らかにしたい。新資料が見つかれば、がらっと変わってしまうのが日本の戦後史。一般の人にも新しい研究成果をできるだけ平易に伝えたいと思います」

『東京裁判』
（講談社現代新書）
前著『東京裁判の国際関係』を基に、靖国神社のA級戦犯合祀問題や「A・B・C級」という訳語にまつわる誤解といった読者の興味を引く話題にも触れながら、最新の東京裁判研究の成果を紹介。第30回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞した

『東京裁判の国際関係――国際政治における権力と規範』
（木鐸社）
博士論文をまとめたこの著書は政治外交に関する優れた業績を顕彰する第32回吉田茂賞を受賞した

左）『東京裁判を正しく読む』
（牛村圭/日暮吉延共著、文春新書）
右）アーノルド・C・ブラックマン著・日暮吉延訳『東京裁判――もう一つのニュルンベルク』（時事通信社）

*3　1946年に公布された極東国際軍事裁判所憲章は、侵略戦争の計画、準備、開始、遂行、共同謀議を犯罪とする「平和に対する罪」で起訴された被告を裁く権限を裁判所に与えていた。同憲章以前に戦争の開始は国際法上の犯罪ではなかったことから、「刑罰不遡及の原則」に反する事後法であると一部から批判された。

更新講習「ものづくりと子どもの発達」（担当:長谷川雅康教育学部教授）の様子。
幼稚園教諭たちが、紙工作の実習を通して手作業と子どもの発達の関係について学んだ

鹿大の新たな試み
Challenges of Kagoshima University

教員免許状更新講習への取り組み
～鹿大の教員免許状更新講習の特色～

平成21年度から教員免許更新制がスタートした。鹿大は「平成20年度教員免許状更新講習プログラム開発委託事業」に採択され、平成20年度に予備講習を実施。全学規模で取り組む鹿大の教員免許状更新講習について紹介する。

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から教員免許更新制がスタートした。今後は、幼稚園から高校までのすべての教員がその職務に必要とされる能力を維持するため、定期的に最新の知識・技能を身に付ける講習を受講することが義務付けられる。[*1]

「本番に近い形での試行」予備講習を実施

鹿大は、教員免許更新制に向けて平成20年4月に「鹿児島大学教員免許状更新講習推進室」を設置し、鹿児島県教育委員会から教育学部が常勤職員として招へいしている教員4名を交じえて、更新講習の内容について検討を重ねてきた。また、学内で制度に関する講演会を実施するなどして、大学全体で更新講習に取り組む準備も進めてきた。

平成20年度には、教員免許更新制に備えて文部科学省が募集した「平成20年度教員免許状更新講習プログラム開発委託事業」に採択され、平成21年度からの更新講習がスムーズに進むよう、予備講習として試行を行った。「本番に近い形での試行」を目指した予備講習には、鹿大の6つの課程[*2]認定学部（法文・教育・理・工・農・水産）が合わせて55科目を提供し、県内外の教員延べ1746名が受講した。この予備講習は科目数・参加者数ともに全国一の規模を誇った。また離島勤務者が多いことを考慮し、離島での講習も実施した。

鹿大の更新講習プログラム4つの特色

この予備講習を踏まえ、平成21年度から、教員免許状更新講習を本格的に開始した。平成21年度の更新講習で鹿大は91科目を提供。課程認定学部以外の医学部・歯学部も参加し、鹿大の全学部と学内共同教育研究施設等の総合研究博物館と生涯学習教育研究センターが、更新講習に参加するという全学体制をとる。鹿大の更新講習の特色は4つある。

❶全ての免許種に対応

鹿大の教員免許状更新講習には、幼稚園、小学校、中学校、高等学校（工業高校、商業高校、農業高校、水産高校を含む）、特別支援学校等のすべての免許種の免許更新に対応できる科目がそろっている。8学部を有する大規模総合大学ならではの取り組みといえる。

❷種子島と奄美大島でも実施

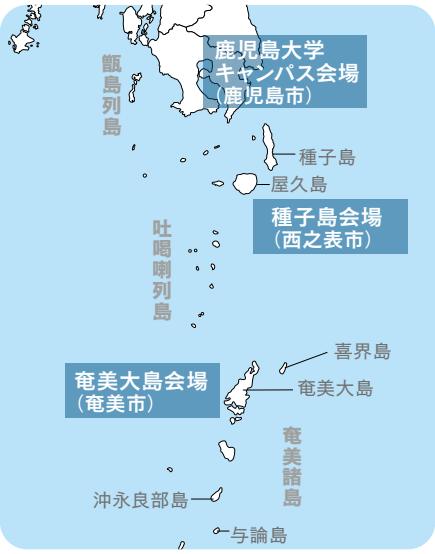
*2 **課程認定学部**
学部学生が教員免許に必要な科目を履修し、単位を取得すれば、教員免許状を取得できる学部のこと。学部などにより免許種は異なる。

*1 教員免許更新制では優秀教員表彰者、教員を指導する立場にある者（校長や副校長、教頭など）を除いた教員が10年ごとに30時間（必修12時間、選択18時間）の講習と修了認定試験を受ける必要がある。

●平成21年度に開講する更新講習の一例

法文学部	「仮名遣の歴史」「歴史研究の現在」「日本国憲法と国際関係」
教育学部	「発達障害児の理解と支援」 「学校教育カウンセリングの理論と実技」
理学部	「生物の野外調査」「古典数学から現代数学まで」
工学部	「最近のインターネットの活用法」
医学部	「生徒の性行動と性にまつわる課題」 「子ども及び教職員の健康問題」
歯学部	「食育と味覚の基礎」「虫歯と歯周病を知る」
農学部	「【農業基礎・情報】農業科学の最前線」
水産学部	「水産（漁業技術）」＊附属練習船での講習 「環境科学教材としてのプランクトン」
総合研究博物館	「郷土の歴史の学び方～考古学と博物館～」
生涯学習教育研究センター	「たのしい科学教育入門」

●教員免許状更新講習を開講する場所



●平成20年度に実施された予備講習の様子

操船・海洋観測実習

数学における問題解決の方法

解剖教材としての魚の乾製品

鹿児島県の県域は南北600kmにも及び、有人離島数28、離島人口数・総面積は全国第一位である。そのため、教員の3～4割は離島・へき地勤務者であるといわれている。少ない便の飛行機や船を利用して講習に参加する受講者の負担は相当なものだ。鹿大では離島においても更新講習を開講することが社会貢献になるとの考えから、キャンパスのある鹿児島市に加え、種子島と奄美大島でも更新講習を実施する。

❸独自の更新講習管理システム

大規模な更新講習を効率的に管理するため、受講者の科目登録の受付、成績処理、履修証明書の発行までを一貫して行うことができる鹿大独自の教員免許状更新講習管理システムを開発した。システムを開発したのは鹿大の事務職員。予備講習時には実際に運用して問題点を改善しており、使いやすいと好評だ。このシステムは鹿大の知的財産として特許を取得しており、県内外の多数の大学が利用している。

❹ユニークな選択科目を提供

鹿大は教員免許状更新講習でユニークな科目を用意している。予備講習でも実施された水産学部附属練習船南星丸を使った洋上実習では、桜島を望む錦江湾での海洋観測法などを学ぶことができる。また、実験・実習を取り入れた科目も多く、その例としては、海岸・干潟での観察・調査、音楽の発声訓練などがあり、今後も座学だけでなく、多様な教育方法による科目の提供を行うこととしている。

問題をクリアし質の高い科目の提供を目指す

予備講習を実施したとはいえ、今年度の更新講習では思いもかけない問題が起こることもあるだろう。特に離島・へき地勤務の受講者にとっては台風などの天候の変化が不安材料となる。不測の事態に大学がどのような対応をとるか、考えなければならないことは多い。

予備講習の授業評価では多くの受講者から良好な評価を得ることができた。ただ、同じ科目でも「高度過ぎて理解できない」という意見と「久しぶりに最先端の知見に触れることができた」という意見が混在する。大坪治彦学長補佐は更新講習の意義をこう語る。「教員は絶えず勉強が必要な職種。先生方自身がどんどんバージョンアップしていただくために鹿大が質の高い科目を提供し、『更新講習を受けるなら鹿大で』と言われるような貢献ができればと考えています」

アラムナイ追跡隊

interview

Masaaki SASAGURI

九州大学病院CLPクリニックにて。
幼児の患者を和ませるためのおもちゃがそこかしこに置かれている

海外援助といっても実際は教えられることのほうが多いんです。

九州大学病院
顎顔面口腔外科
笹栗 正明さん

● profile
1960年福岡県生まれ。福岡県立鞍手高等学校卒業。85年鹿児島大学歯学部歯学科卒業後、九州大学病院第一口腔外科入局。97年～99年インドネシアに滞在し、ハラパンキタ小児産科病院口唇口蓋裂センターにて医療協力活動を行って以来、インドネシアとの関係を継続。99年からは日本口唇口蓋裂協会の活動の一環として、バングラデシュ・ダッカ大学での医療援助活動にも参加。現在、九州大学病院顎顔面口腔外科准助教。

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。
各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や留学生などのユニークな活動を紹介します。

大学4年のときの卒業旅行にて
（左から2人目が笹栗さん）

*1 **口唇口蓋裂**（こうしんこうがいれつ）
口唇（くちびる）や口蓋（上あご）に被裂を生じて生まれる病気のこと。患児は形態的、機能的、社会的に多くの問題を抱え、複数の診療科による包括的な診療体制が必要である。発展途上国では経済的理由や医療施設の不十分さから治療を受けられない患者が多い。

技術を身につけて人の役に立つ仕事をしたい

幼いころ、親類の技工士さんの仕事場でよく遊んでいた記憶があります。小学校の卒業文集には「歯医者になって歯槽膿漏の薬を開発して一山当てたい」と可愛げのないことを書いていました（笑）。技術を身につけて人の役に立ちたいということは幼いころから考えていたようです。

学生時代は、野球部や家庭教師のアルバイトに毎日忙しかったですね。ある家庭教師先のお宅とは今でも交流が続いています。僕は、鹿児島が大好きです。あの桜島と青い空はいつも思い出します。鹿児島は人が温かい。学生さんとのつながりも大事にしてくれる包容力があり、温かみのある土地柄だと思います。

腫瘍治療から口唇口蓋裂治療へ

鹿大卒業後は九州大学病院の第一口腔外科に入局し、腫瘍グループの一員として働いていました。1993年に、インドネシアの病院から「口唇口蓋裂治療の体制を整えたい」[*1]と口唇口蓋裂が専門の第一口腔外科の大石正道教授に援助要請があり、中村典史先生（現鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）がインドネシアへ派遣されました。

中村先生が赴任されてまだ1年経たないころ、後任として行かないかという話がありました。私には畑違いの分野であり、あまり気乗りはしませんでしたが、とにかくやってみようと考えました。それから大石先生の特訓を受け、インドネシアに行ったのが口唇口蓋裂との関わりの始まりです。

選り好みせずやってみるのも一つの生き方

いざ向こうへ行ったら、とたんに激しい下痢の洗礼を受け、さらに家庭教師をつけて勉強したインドネシア語が通じない。引き継ぎの時、中村先生がインドネシア語で現地スタッフに流暢に指示を出す姿を見て、明日から自分がこれをやるのかと不安は募るばかりでした。本格的に仕事が始まると、身振り手振りと片言の英語でやりとり。頻繁に耳にするインドネシア語を毎日メモして必死に覚えました。赴任当初は2年後の帰国の日を指折り数えていましたが、ひと月もいたらすっかり馴染んで、帰国前には日本に帰りたくないと思ったほどです。

98年の5月暴動[*2]では、病院や宿舎の周りにも暴徒が押し寄せて外出ができず、多くの商店が焼かれ、米も水もなくなり途方にくれていた時に現地の人たちが助けてくれて、本当に嬉しかったです。海外援助と言っても、逆にこちらが教えられたり助けられたりすることのほうが多い。今はインドネシアなしの自分は想像できません。

目標を決めて仕事を取捨選択するのも一つの方法ですが、自分の夢を持ちながら、目の前に現れた仕事には挑戦していくのも一つの生き方じゃないでしょうか。腫瘍の治療は人の生死に関わる責任の重い仕事ですが、口唇口蓋裂の治療も患者さんの人生のスタートから一生に関わる、とてもやりがいのある仕事です。

インドネシア・ハラパンキタ小児産科病院での口唇口蓋裂手術を見学に来たインドネシア人医師たちと

バングラデシュ・ダッカ大学で手術をした女児たちと。
「帰国時、見送りに来てくれて感動しました（笹栗さん）」

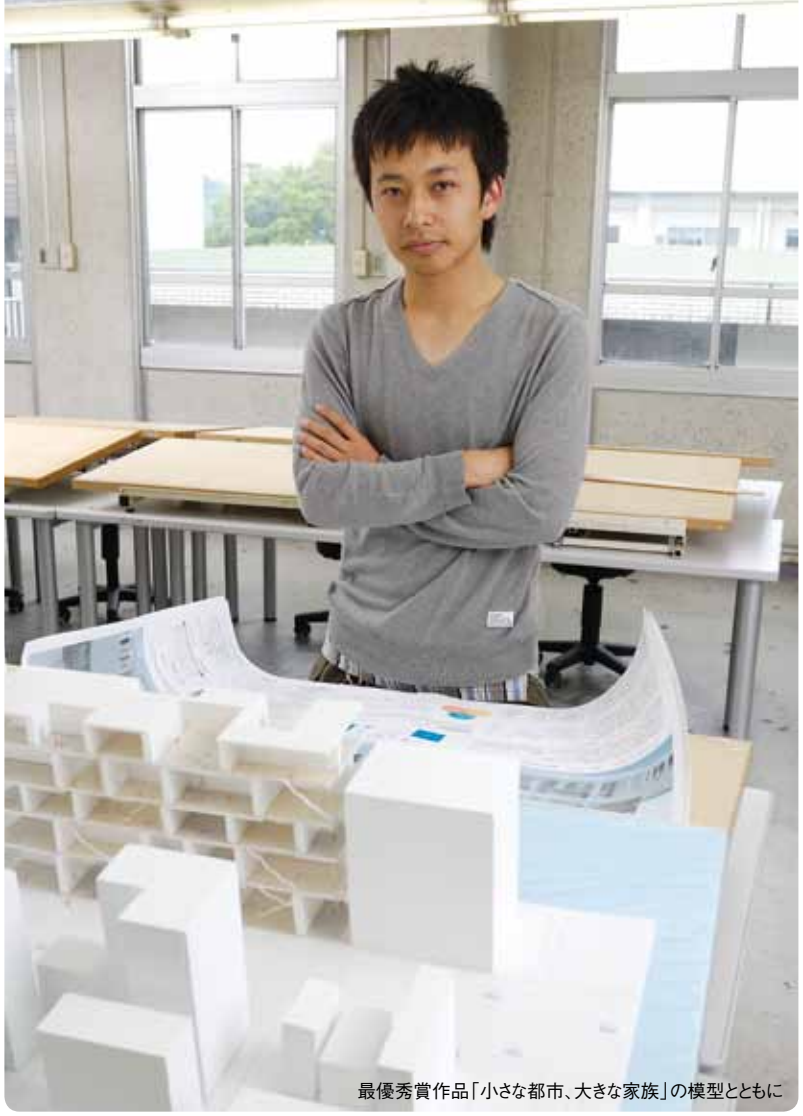
「敬に居て簡を行う」ことの大切さを知る

インドネシアでの仕事は口唇口蓋裂治療の包括的診療体制づくりのサポートでした。口唇口蓋裂について知ってもらうため、保護者教室の開催やパンフレット作成などもしました。大切なのは僕らが帰った後、これらを継続してもらうことです。現地では多くのことがKira-kira（インドネシア語で「だいたい」の意）であったり、お祈りで仕事が中断したり、日本では考えられないこともありましたが、日本のやり方の押し付けではだめ。「敬に居て簡を行う」[*3]という言葉のように、こちらのやり方を押し付けず、相手の状況を理解し、スタイルを尊重することが大事だと学びました。こうした活動は個人レベルでは限界があります。今後、継続発展させるためには、国や大学の援助が必要不可欠です。

口唇口蓋裂の治療は施設によって治療法が異なり、職人技的な側面もあります。職人技ではなく、誰でもどこの国でも安定した治療成績が得られるような治療体系づくりに努力したいです。

*2 1998年5月、スハルト大統領（当時）の退陣要求を掲げた反政府集会に参加していた学生が撃たれ、死亡したことをきっかけに勃発した暴動。ジャカルタ市内の商店や銀行などが放火・略奪され、2000人以上の死者が出た。

*3 **敬に居て簡を行う（居敬而行簡）**（けい・かん）
『論語』の中の言葉。自らは礼儀正しく行いは慎むが、他人の無作法には寛大であれとの意味。



最優秀賞作品「小さな都市、大きな家族」の模型とともに

価値観を変えれば鹿児島が中心になれる。
そんな仕事をしていきたい。

鹿大生 輝く

vol. 9
Tomiyama Kouichi

富山晃一さん

理工学研究科博士前期課程
建築学専攻2年
［鹿児島県出身］
鹿児島県立甲南高等学校卒業

審査員から講評を受ける3名
（右から富山さん、岩元さん、津野田さん）

平成20年12月、富山晃一さんは同じ理工学研究科の岩元俊輔さん・津野田祐基さんとともに全国の学生・大学院生対象の建築設計競技「第2回長谷工住まいのデザインコンペティション」で応募総数378点の中、最優秀賞に輝いた。

競技テーマは「30年後の集合住宅」。富山さんらは、現在の集合住宅が同じ世代・家族形態の人しか住めないことを問題と考え、広い共有空間と個室を効果的に配置し、世代や家族形態が変わっても住み続けられる新しい集合住宅の形を提案した。審査委員長で世界的建築家の隈研吾氏から「現在でも30年後でも通用する場を、空間的にもはっきりと定義しているところが興味深い」と高く評価された。「3人で議論して案を練り上げました。考え抜いた作品でしたが、最高賞をもらえるとは思わなかった。うれしいです」と富山さん。

中学時代に建築家ガウディを知って以来、建築設計の仕事にあこがれを持ち続けてきた。高校卒業後、鹿大の工学部建築学科に進学した。「日本でも一流の建築家が先生としていらっしゃって、学ぶ環境はとても良かった。実際に自分の手で図面を引いてみて、やっぱり設計は面白いと思いました」。富山さんは学部4年生のときから年に数回、設計競技に応募している。また、これまでに2度、東京でオープンデスク[*1]も経験した。「事務所でいろんな技を学べたことが今に活きていると思います」

卒業後は県外の建設会社への就職が決まっている。「将来は鹿児島で仕事をしたい。鹿児島でも第一線で仕事はできるし、鹿児島が中心になってできることもあると設計競技を通じて気づきました。鹿児島でそういう仕事ができればと考えています」

第2回 長谷工住まいのデザインコンペティション
表彰式の様子
（平成20年12月14日、東京国際フォーラム）

私の座右の銘

ナナイロコトバ

「塞翁が馬」

物事には何でも「良い面」「悪い面」があると思っています。ネガティブに見えることもポジティブに考えることで、何か新しいものが生み出せるのではないかと考え、いつも行動するようにしています。

＊1 オープンデスク
建築家を志す学生が設計事務所や建築事務所で模型制作や設計補助などの実務を経験すること。

「北米教育研究センター」

JUNBAサミット

職員海外研修プログラム

日米未来フォーラム

シリコンバレーセミナー

シリコンバレーに位置する鹿大のブランチオフィス

北米教育研究センターは、ＶＢＬシリコンバレーオフィス（平成16年設置）を改組し、平成20年9月に設置された鹿大の海外拠点です。サンフランシスコ・ベイエリア地区にあり、北米地域での教育・研究・社会貢献活動の推進がその役割です。ベイエリア地区にあるピクセラ・コーポレーションの経営者で鹿大ＯＢでもある井手祐二氏がセンター長兼特任教授を務めています。ベイエリア地区は全米のベンチャー投資額の40％が集中し、多数のベンチャー企業や優れた大学が存在する地域で、最先端科学技術のメッカと言われています。

現在、センターを拠点に様々な活動が展開しています。「シリコンバレーセミナー」は学生と職員が参加し、著名なベンチャー企業の訪問や現地大学との交流、日本人エンジニアや研究者との討論会などを行っています。センター主催の「日米未来フォーラム」では次世代を担う日本と米国の若者のために、そして日米両国の新しい関係を考え行動することを目的に、講演やパネル討論会などを実施。ベイエリア地区に海外拠点を置く日本の大学で組織するＪＵＮＢＡ（サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク）においては、現在、井手センター長が会長を務め、シンポジウムやテクノロジーフェアを開催しています。平成20年には鹿大主催で「国際技術移転フォーラム」を初めて実施。将来、米国の大学や企業との共同研究を進める予定です。平成20年8月に開始された「職員海外研修プログラム」では、鹿大の事務職員が短期海外研修職員として交代で英語・実務研修に励んでいます。

今後は、米国で活躍する日本人講師による遠隔講義「国際プロフェッショナル概論」、イノベーションに関わってこられた方を講師に迎えた「国際イノベーション概論」、シリコンバレーセミナーを発展させたプログラムや学生の留学支援などを計画しており、鹿大の国際活動の拠点として重要な存在となっています。

鹿児島大学北米教育研究センター
Kagoshima University North American Center
633 Giguere Court, San Jose, CA 95133, USA
TEL: +1-408-251-0100（Ext.206）　FAX: +1-408-251-0161
業務時間：月曜日～金曜日 午前９時から午後６時

稲盛アカデミーが本格始動 ～約2,000名が履修登録～

平成20年4月に改組した「稲盛アカデミー」。一部の講義は昨年10月にスタートしましたが、今年度から前期共通科目に45科目を提供することで本格始動し、約2,000名の学生が履修登録しました。

とくに経営理念、経営哲学、人間観などを学問的に発展させた「重点科目」は、稲盛アカデミーの特徴的な10科目。前期ではそのうち、「先人に学ぶリーダーシップ」「人間力経営」「生き方と道徳」「20歳からのハローワーク」が開講されます。

「稲盛アカデミー」は、鹿児島大学では京セラ(株)および稲盛和夫京セラ名誉会長(工学部OB)からの寄附により設置した「稲盛経営技術アカデミー」を改組したもので、「豊かな人間力を持った次世代を担う若者を育てたい」という稲盛氏の思いのもと、「世のため、人のために尽くす高い倫理観を持った『人材』の輩出を目標に掲げ、地域社会から望まれるリーダーを育成する」ことを基本理念に、鹿児島大学における新たな教育研究をめざします。講義の一部は一般の方も受講できる公開授業で、後期の受講生募集は8月下旬の予定です。

講義の様子

記者会見の様子

水産学部附属練習船かごしま丸 皆既日食航海に係る記者会見を実施

鹿児島大学では、水産学部と理学部合同の学際フィールド教育研究事業として、水産学部附属練習船かごしま丸による今世紀最大規模の皆既日食の観測航海を実施することになり、4月22日、記者会見を行いました。

この事業は7月22日の皆既日食にあわせて、7月20日から24日までの5日間、学生実習科目「洋上科学技術実習I」および「大学院基礎乗船実習」の一環で船舶による皆既日食の科学観測を行うもので、船上からの本格的な観測は国内で初めてとなります。

航海には神戸大学、国立天文台、宇宙航空研究開発機構(JAXA)、仙台市天文台、近畿大学、埼玉大学の研究者も参加し、太陽コロナの観測や日食による大気・気象変動などを観測します。また、学部学生や大学院生に対し、海洋観測実習のほか研究者による太陽物理学、惑星科学、海洋科学の講義などの学際的な実習・教育を行います。さらに、天文や海洋に興味のある鹿児島県内の高校生(5名)を募集し、科学観測や学生実習の現場を体験させることで、科学への興味をさらに深めてもらう機会としています。

農学部100周年記念焼酎「あらた百」の販売を開始

農学部では、今年3月に開学100周年を迎えたことを記念して、同学部同窓会と協働して焼酎造りを進めてきており、このほど本格芋焼酎ができあがり、5月1日から県内の焼酎メーカーから発売開始されました。

同学部では、前身である鹿児島高等農林学校が明治42(1909)年に開校されてから100周年を迎えるにあたって、記念事業実行委員会を組織。各種記念行事の一環として製造・販売された「あらた百」は、農学部附属農場で栽培したサツマイモ「コガネセンガン」を原料として、農学部附属高隈演習林(垂水市)から湧き出る「高隈の名水」を仕込み水に使い、天璋院篤姫のゆかりの地である今和泉島津家の別邸跡地から採取した土から分離して得られた酵母を農学部焼酎学講座において培養し、県内の焼酎メーカーに製造を委託したもの。

同焼酎は、高等農林学校開校以来農学部のキャンパスがある田園地帯の地名(現郡元キャンパス)と「新しい」の意およびラテン語で「翼」を意味する「あらた」に加え、100周年記念であることから「あらた百(ひゃく)」と命名されました。

収穫の様子

■商品名「あらた百」
■度数・容量 25%・720ml(カートン入り)
■価格 1,764円(消費税込み)

●「あらた百」ご注文ならびにお問い合わせ先
薩摩酒造株式会社 明治蔵
電話(フリーダイヤル)0120-4673-55
FAX(フリーファックス)0120-4673-41

「蟹江松雄賞」を授与

農学部では、3月24日、「蟹江松雄賞授賞式」が行われました。

同賞は、焼酎をはじめとする地域伝統産業の振興に尽力された蟹江松雄元鹿児島大学長（昭和50年～55年）の胸像建立の際の募金剰余金を基に設立された「蟹江松雄先生顕彰会」が創設。県内の地域伝統発酵産業に貢献する研究業績を挙げた社会人（研究グループを含む）や学業に専念し成績優秀かつ品行方正で、将来地域伝統発酵産業への貢献が出来る学生を対象に表彰するもの。第1回目となる今回の募集には、社会人部門に4件、学生部門に5件の応募があり、社会人部門1グループ、社会人部門特別賞1グループ、学生部門2名が選ばれました。社会人部門に芋焼酎のイモの品種で違う香りを作り出す共同研究を行った大口酒造並びに工業技術センター、社会人部門特別賞に焼酎業界連携や製造技術向上に貢献した鹿児島県本格焼酎技術研究会、学生部門に篤姫ゆかりの地から分離した酵母を使った焼酎を商品化した大山修一さん（農学研究科2年）と紅麹菌の生育や製麹法の開発などに貢献した薄　朋香さん（農学部4年）が受賞し、表彰状と記念品等が授与されました。

授賞式の様子

（財）横浜企業経営支援財団と産学連携協定を締結

5月28日、鹿児島大学は、（財）横浜企業経営支援財団と産学連携に関する協定書を締結しました。この協定は、鹿大と財団が有する人的・物的資源を有効に活用して相互に協力し、地域産業の振興並びに地域社会の発展に寄与することを目的としたもの。

今後の主な業務提携は、鹿大の横浜市をコアにした首都圏における産学官連携の推進、鹿児島大学のシーズと横浜市内企業とのマッチング、財団が保有する産学官-金融連携ネットワークの活用、鹿児島大学横浜サテライトオフィスの設置を予定しています。

入試成績優秀者に「スタートダッシュ学資金」を授与

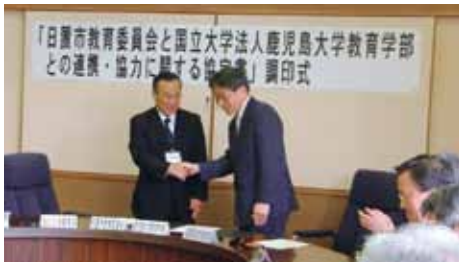
5月22日、鹿児島大学では、平成21年度に入学した学生のうち、入学試験において優秀な成績を修めた学部生35名および大学院生14名に対し、スタートダッシュ学資金授与式が行われました。授与式では、吉田浩己学長から奨学生に決定通知書が授与され、続いて、奨学生代表者が「様々な人との出会いを大切に目標に向かって切磋琢磨しながら頑張っていきたい」と決意を述べました。

この学資金は、勉学意欲の向上や優秀な人材の輩出などを図ること目的として、鹿大が独自に設けた返還を要しない学資金制度で、学部生については大学入試センター試験の結果が学部又は学科（課程）の上位である者、大学院生については各研究科が実施する入学試験の結果が研究科又は専攻の上位である者が対象となっています。

教育学部がいちき串木野市教育委員会および日置市教育委員会と連携協定締結

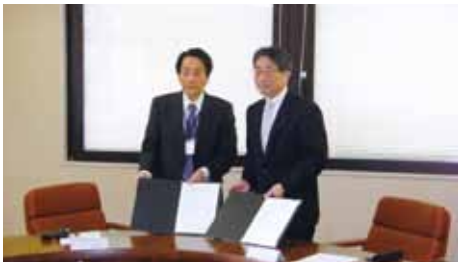
教育学部が3月に日置市教育委員会およびいちき串木野市教育委員会と連携協力に関する協定を締結しました。

16日には日置市との間で調印式が執り行われ、平成19年度から実施している教育学部学生による複式学級での学習指導補助事業のほか、同教育委員会の所管する教員の資質向上や学生のインターンシップ等まで連携を拡大することとしています。



協定書に署名後握手する河原教育学部長（右）と田代日置市教育長

また、23日に調印式が行われたいちき串木野市との間では、平成16年度からの「いちき青松塾」（現いちき串木野市青松塾）事業への学生の派遣をきっかけとして、今後、いちき串木野市教育委員会の所管する教員等の資質向上のための研修や教育学部に所属する学生のボランティア活動およびインターンシップにおいて連携協力を図っていく予定です。



山下いちき串木野市教育長と河原教育学部長（右）

就職応援講座と個別相談会を開催

5月20日、就職支援センターでは、学部4年生および大学院2年生を対象に就職応援講座と個別相談会を開催しました。これは、就職活動を経て、現段階で就職内定を得ていない学生が抱える様々な悩みや課題に対するアドバイスやメンタル的なサポートを主に行うことを目的として行われたもの。

個別相談会の様子

就職応援講座では「これからの就職活動」と題して株式会社毎日コミュニケーションズ九州支社マイナビ担当の吉本久美氏による講演が行われ、約50名が参加しました。厳しい就職環境をふまえ、今回初めて行われた個別相談会では、(株)リクルート、(株)毎日コミュニケーションズや(株)ディスコのキャリアコンサルタントと鹿大就職支援室長が、事前に予約した学生一人ひとりの悩みに答え、アドバイスしました。

就職支援センターでは、今年度から就職未内定者の学部4年生と大学院修士課程2年生に対しても、より実践的な支援講座等を実施し、就職支援を一層強化することとしています。

「大学地域コンソーシアム鹿児島」を設立

「大学地域コンソーシアム鹿児島」がこのほど設立されました。

これは、鹿児島県内の13の高等教育機関(鹿児島大学、鹿屋体育大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、志學館大学、第一工業大学、鹿児島県立短期大学、鹿児島国際大学短期大学部、鹿児島純心女子短期大学、鹿児島女子短期大学、第一幼児教育短期大学、鹿児島工業高等専門学校、放送大学鹿児島学習センター)が相互に連携・協力し、高等教育の質的向上を推進することにより、地域の教育及び学術研究の充実・発展を図るとともに、魅力ある高等教育づくりと活力ある地域づくりに貢献することを目的として生まれた協同体。

同コンソーシアムの会長には、鹿児島大学の吉田浩己学長が選出され、今後、関係自治体(鹿児島市、鹿屋市等)等と連携を図りながら、単位互換や、教員免許状更新講習、産学官連携等の幅広い分野で連携・協力し、各事業を推進することとしています。

大学院医歯学総合研究科が鹿児島医療センターおよび今村病院分院と連携協力協定を締結

大学院医歯学総合研究科と独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センターおよび財団法人慈愛会今村病院分院は4月1日付けで連携協力に関する協定を締結しました。

この連携協力は、学生の教育・研究指導の一層の充実と学生の資質向上を図り、相互の交流を促進することで学術及び科学技術の発展に寄与することを目的とするものです。

今回の連携協力に合わせ、同研究科の先進治療科学専攻に先端医療学講座「生理活性物質制御学分野」、「血液腫瘍学分野」を新設し、それぞれ独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センターの臨床研究部長の城ヶ崎倫久氏と財団法人慈愛会今村病院分院の分院長宇都宮與氏が客員教授に就任しました。

今後、学外における高度な研究水準をもつ地域の病院の施設設備や人的資源を活用して大学院教育を行うものです。

大学院医歯学総合研究科における連携協力に係る協定締結は、平成18年の財団法人宇宙航空研究開発機構以来2例目となります。

駐日フィンランド大使来学記念講演会を開催

5月8日、教育学部ではヨルマ・ユリーン駐日フィンランド大使をお招きし、「優れた教育制度と男女同権の国」と題する記念講演会を開催しました。

講演会の様子

講演でユリーン大使はOECD(経済協力開発機構)が実施するPISA(国際学習到達度調査)において、つねにトップ評価を得るフィンランドの教育制度の秘訣として、論理的・行動的な考え方と個性を大切にした授業、落ちこぼれを作らない補習体制、30名以下の少人数クラスや学校ごとの自由裁量の高さなどを紹介。また、小学校から大学まで授業料は無料、税金で賄われるが「人材こそがフィンランドの資源」という国民的コンセンサスが根底にあると解説しました。

会場の稲盛会館は300名を超える学生・教職員と市民の方で満席となり、教育や社会制度に対する関心の高さをうかがわせるものとなりました。

鹿大への提言 第6回

これからは鹿大が地域に打って出るべき。身近でオープンな大学を実現してほしい。

鹿児島県観光プロデューサー　奈良迫 英光氏

旅行業界を経て、現在は鹿児島県の観光プロデューサーとして県内各地で活動しています。その立場から鹿大への提言ができればと思います。

■ 学生時代はいろいろな体験を通し視野を広げて

私は鹿児島出身で鹿大のOBです。学生時代は地理学研究会に所属しており、鹿児島県内の多くの離島を訪問しました。夏休みにはアルバイトで貯めたお金で、北海道、東北、東京の石川啄木の足跡をたどる旅もしました。学生時代には時間とお金を視野を広げるために使ってほしいですね。

鹿児島県は島と海洋を含むと南北600kmにも及びます。県外に就職すれば、離島に足を運ぶ機会はほとんどなくなります。離島にはそれぞれの歴史や固有の文化があります。学生時代に、ぜひ大学のある鹿児島県の良さを知ってほしい。いろいろな人と交流することで人は成長します。最近は、ちょっと変化が起きるとそれに対応できない若い人が多い。さまざまな体験を通じて適応力のあるバランスのとれた人間になってほしいと思います。

■ 鹿大は環境分野における最先端を目指すべき

鹿大には、離島を数多く有する鹿児島に根ざす総合大学として、環境分野での最先端になっていただきたいと思っています。鹿児島の離島は沖縄などと比べて開発途上ですが、その分、手付かずの自然がたくさん残っています。火山、温泉、世界遺産登録地の屋久島、世界遺産登録を目指している奄美群島など、他県にはない要素も多い。これからは環境の時代。独自の素材を活かした教育・研究や社会貢献を期待しています。

また、農業が見直されている今、鹿大にはより一層第一次産業を応援していただきたい。収穫した農産物を原料として出すだけでなく、地元で加工して付加価値を付けることができれば、新しい産業や雇用も生まれます。鹿大の卒業生が県内で活躍する場も増える。加工に関する技術開発を鹿大に担っていただければ、地域経済の浮揚にもつながると考えています。

■ 教員の力で鹿大や鹿児島をプロデュースしてほしい

われわれから見ると、鹿大が身近な存在であるとはまだ言えません。これからは大学が自ら社会へ打って出なければならないと思います。その点、鹿大が垂水市と行っている取組みは素晴らしいですね。また分野を超えて教員同士が交流し、マスメディアや地域の会合に出席する機会を今よりどんどん増やすと良いのでは。その積み重ねが住民にとって鹿大を身近な存在にしますし、大学のPRにもなります。高校生や学生が「鹿大にはこんな先生がいたんだ」と刺激を受けるかもしれません。鹿児島という地域の特色を活かし、鹿大や鹿児島をプロデュースできる先生方がもっと増えれば、われわれとしても大変心強いですね。

ならさこ・ひでみつ/昭和25年鹿児島県有明町（現志布志市）生。昭和48年に鹿児島大学法文学部を卒業後、近畿日本ツーリストに入社。北九州支店長、鹿児島支店長、旅行事業創発本部課長などを歴任。その間九州各地のまちづくり会議委員、鹿児島県観光アドバイザー。平成18年に薩摩大使に任命された。平成20年4月、日本旅行業協会（JATA）から出向し2代目の鹿児島県観光プロデューサーに就任。日本観光研究学会会員。

鹿大なんでも情報版
Kagoshima University Information

鹿児島大学創立60周年記念事業のご案内

鹿児島大学では、創立60周年を記念して記念事業を11月24日（火）に行います。当日は創立記念式典および国際シンポジウムを開催するほか、「鹿児島大学歴史展示室（仮称）」の開室セレモニーも予定しています。

お問い合わせ
鹿児島大学総務部総務課　TEL099-285-7022

農学部開学100周年記念事業のご案内

農学部では、開学100周年を記念して記念事業を行います。各種記念行事ならびに記念誌の刊行、記念焼酎「あらた百」の製造、歴史的建造物および庭園などの環境整備のほか、11月23日（月・祝日）に記念式典や記念講演会を開催いたします。

お問い合わせ
農学部開学100周年記念事業実行委員会　TEL099-285-8537

◎鹿大ジャーナル／第181号 平成21年7月発行 〔編集・発行〕鹿児島大学広報センター 〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21番24号 電話 099-285-7035 FAX 099-285-3854 E-mail sbunsho@kuas.kagoshima-u.ac.jp

かごしま探訪 第4回

「薩摩焼酎にみる地域おこし」

鹿児島大学農学部　鮫島 吉廣 教授

焼酎学講座学生の焼酎製造実習

薩摩焼酎のもっとも古い記録は、1546年、山川に滞在したポルトガルの商人がザビエルに書き送った報告書で、当時米焼酎が飲まれていたことが記されています。「焼酎」という文字は永禄二歳（1559年）の年号が入った伊佐市郡山八幡神社の落書が初見です。当時は米焼酎でしたが、18世紀初頭にサツマイモが伝来して芋焼酎が誕生し、米不足の薩摩では芋焼酎が急速に普及することになります。

しかし当時の技術は稚拙で、明治中期になっても「衣服ことごとく臭う」すさまじいものでした。明治後年になって、芋焼酎の改良のためにさまざまな工夫改善がなされ、そこから鹿児島式二次仕込法と呼ばれる製造法が開発されます。この製造法は後年、日本全国に普及し、多彩な原料を用いた焼酎造りを可能にし、昭和50年代の焼酎ブームを巻き起こすことになります。上品で柔らかな味わいを持ち、お湯割りで自在の濃さで呑むことができ、料理との相性が良く、酔い覚めの良い薩摩焼酎の特性は健康的な酒として焼酎のイメージを高め、全国で飲まれるようになりました。

酒つくりには不向きといえる温暖な南国の気候と、扱いにくいサツマイモのハンディを逆手にとった製造法やお湯割りの飲み方など、焼酎には鹿児島の風土がぎっしりと詰め込まれています。薩摩焼酎の歴史は、ハンディを知恵と執念で克服し、工夫の数がオリジナリティを生み出し、厄介と思われた風土が今では守りの壁となって、焼酎王国を作り上げてきた歴史といえます。

地域の資源にこだわり、その可能性を引き出す技術を開発し、オリジナリティのある味わいを生み出し、新たな世界を築いていく。焼酎は地域おこしの格好のモデルでもあります。

お知らせ

●保護者向け広報紙『鹿大だより』第3号を発行しました

『鹿大だより』第3号では、最新の取組みとユニークな教育をまとめた「進化する鹿児島大学の教育」を中心に、施設・設備や就職支援体制、鹿大の主な出来事などをお伝えします。詳細はhttp://www.kagoshima-u.ac.jp/contents/gaiyou/pub/kadai_dayori3.pdfをご参照ください。

●オープンキャンパスのご案内 期日：平成21年8月6日(木)～7日(金)　お問い合わせ：入試課　TEL 099-285-7061

各学部で学部説明会、研究室公開や模擬授業等を行います。高校生、保護者、先生方の参加をお待ちしています。

●学生支援寄附金の募集のご案内

鹿児島大学では、学生支援を目的とした寄附金を募集しています。寄附は一口5,000円から。事業内容については、学生生活課099-285-7331までお問い合わせください。詳細はhttp://hh.kuas.kagoshima-u.ac.jp/kouhou/kihukin/index.htmをご参照ください。

〈表紙〉

●開聞岳とサツマイモ畑

薩摩半島南端にそびえる開聞岳。その山裾には青々としたサツマイモ畑が広がる。芋焼酎やデンプンなどの原料に利用されるサツマイモは、鹿大の研究対象としても欠かせない。その成果を地域に還元することは、この豊かな大地をますます潤すことにつながるだろう。

編集後記

『鹿大ジャーナル』は、前身『鹿大広報』から通巻181号。今年創立60周年を迎える鹿児島大学の歩みとともに、本学の様々な活動を伝えてきました。法人化直前に現在の誌名に変更、年3回という限られた誌面の中で、特集はもちろん各連載についても、鹿児島大学の現在を様々な側面から広く皆様にご理解いただけるよう、毎号の発行に努めています。本号からは表紙を刷新、連載「かごしま探訪」と関連して、鹿児島の持つ様々な魅力と本学の教育・研究との関わりを紹介する写真を掲載していきます。

本学は来年から、第二期中期目標・中期計画の実施に向けて新たな歩みを始めます。その活動を適切に、詳細に伝える広報誌として、今後も「鹿大ジャーナル」を更に充実させていきたいと考えています。今後ともご愛読、ご意見を賜りたいと存じます。

広報担当学長補佐　鈴木 廣志

PRINTED WITH SOY INK